

虐待の連鎖を断ち切って
～「語ること」と「聴くこと」の力
Prevention of Succession of Child Abuse :
Well Talking and Well Hearing.

赤岡 美津子
Mitsuko Akaoka

I・はじめに

この面接は、「反抗的な娘への、母親としての対応の仕方」を主訴として始まった。しかし面接の中で、来談者自身が自身の母親から受けた、心理的虐待ともいえる事象の数々が語られた。それらへの怒り、尊重されなかった悲しみ、それに起因すると思われる自尊感情の希薄さとその不安も語られた。「母親」に関する肯定的モデル像もなく、対人スキルも未熟なまま、転勤を伴うサラリーマンの妻としての孤独な子育ての葛藤や、にも拘わらず彼女の中に存在する「旧家」の文化・矜持の払拭し難さも語られた。

彼女は、娘との問題を契機に面接室を訪れたのであるが、娘の受験をめぐる現実の生活を語りつつ、並行して自らの母子関係を語られた。その中から、自己の体験とは異なる新たな母子関係・家族の構築を望み、更に自身の向後の生き方の模索へと歩を進められた。

面接は15回、期間は約10ヶ月であった。筆者は毎回、深い感動と共に彼女の語りに同行したのである。以下その概要を述べる。

II・事例の概要

【来談者】和子さん（仮名・他も全て仮名である）、40歳、主婦。

【主訴】中学校受験を目指す娘の反抗；それに対する母親としての対応について

申込票には、「子ども； 反抗的態度（受験で疲れているのかも知れません）」。

母親； 「いけないと思いながら、トラブルになってしまう。たたいてしまう」と記されてあった。

【家族】 夫（孝男）；41歳 会社員 本人（和子）；40歳 主婦
娘（亜紀）；11歳 小学校6年生 弟（翔）；5歳 幼稚園年長組

【生育歴1；娘・亜紀さん】

夫の勤務地であるA市の近郊B市で誕生。満期出産・正常分娩。順調な成長であったが、「癩の強い神経質な、母である私にとってはとても難しい子」であった。幼児期より、活動的・社会的であった。躊躇する私を強引に促して、「公園デビュー」をし、同年齢の子とよく遊んだ。3歳で夫の転勤に伴い首都圏C市へ。幼稚園入園。年中時よりピアノのレッスン。1年続けたが本人はこれを好んではいなかった。年長時、私に無断で「先生に直接談判して」レッスンを止めた。そして、本人の希望でクラシックバレエを始めた。小学校4年まで継続。人間関係・学業共に良好。3年生2学期より中学校受験を意識して週1回の割合で通塾。「本人は不本意であったが、私が丸め込んだ」。4年時より塾の進学指導は本格化。バレエとの両立は困難になったので、私は「叱りつけて」止めさせた。娘は不服であった。5年時、再びA市転勤に

伴い、公立小学校に転入。進学塾に入塾。

【生育歴；本人・和子さん】

D市の出身。代々の家業を継ぐ旧家の長女。近隣に親戚縁者が多数いる。住居は職場に隣接し、広い庭と高い塀に囲まれていた。最も古い記憶は、まだ自分で歩くことができなかった頃のものである。夜半に目覚めて不安になり、いくら泣いても母はベッドの傍らに来てくれなかった。そのうち泣き疲れてぐったりしてしまう。何度もそんな事があった。そのために脱腸になった。治療すれば直るものと、母は軽くしか考えてくれなかった。

躰はとても厳しく、私や妹の心情を無視し、世間や親類縁者に対する体面を保つこと、母の価値観を満足させることのためのものであった。遊ぶ友達も母が決め、いつも家の中で遊んでいた。塀の外からは子どもの声が聞こえていた。その声に誘われて、よちよち歩きのある日、1人で外に出た。数人の子どもたちが遊んでいたが、その手前で立ち竦んでしまった。「私には入ったらいけない世界」と思った。そのことのせいか、対人関係にはいつも恐怖心が付きまとう。

自分が母親になって、娘を外で遊ばせるようになっても、他の母親達に立ち交じわるのが嫌だった。そんな私の手を強引に引っ張って娘は皆の中へ入って行った。「私とは違ってとても強い娘」に私は助けられた。

中学校受験に失敗、地元公立中学校に入学。母からは「お前は馬鹿だ。」と罵られた。尤もそれは以前からも屢々言われていたことだったけれど。

ピアノのレッスンもずっと続けさせられていた。だから娘が幼稚園の時、自力で稽古を止めたのには、一方で「すごい」と思いながら、他方「私は母の言に従ってずっと続けたのに」と思った。

高校は一応進学校に合格。家では成績のことで責め続けられ、学校でも辛く、朝家を出ては電車に乗り、1日中過ごしたことも度々ある。「非行」するにもそんな人達が怖くて近づけない。通知票に書かれた欠席日数を見てまた母親に叱られた。「お前のような出来損ないには相応しい」と母が言った、或る大学に進学、卒業。

23歳の時、精神的に不安定になり、「自分の力で自分を持ち堪えることができなく」なり、友人の勧めで神経科に通院。その友人には今でも感謝している。2年近く通い、状態は改善された。結婚によってB市に来たので、通院は終わった。

25歳で結婚。夫は、私と同じ中学校の1年上級生。夫の実家は「極く普通」の家庭で「家柄が釣り合わず」、「結婚は許さない」と親族一同の反対を受けた。

夫はその頃、「男性としては何もない、かけ出し」であったが、「私の目から見て、安定し自立していて頼りがいのある男性。夫としても社会人としても父としても立派」であった。「立派な家庭を作って、母を見返してやりたい」と思い、反対を押し切って「決行」した。「結婚は合法的な家出」であった。

夫の勤務地であるA市近郊のB市に住んで長女出産。友達もなく孤独な中での育児。むずかる娘を前に、絶望的な気持ちになることも屢々であった。

こういう状態の中で、今から約10年ほど前、A市のクリニックでカウンセリングを受けた。2年ほど続いたが、夫の転勤で首都圏C市に転居したため中断した。

C市での社宅生活。互いの激しい競り合い。学歴・家柄等々の自慢。激しい自己主張をしながら互いに孤独。「魂が彷徨っているような感じがする街」。「閉塞感でノイローゼになりそう」であった。消費をして気を紛らしていた。

再度A市への転勤、娘は地域の小学校5年生に転入。「自分のような軟弱なものは、首都圏のど真ん中から帰りなさいということかな」と思った。今住んでいる所は、のんびりしていて私には似合っているのかも知れない。

【問題歴】

娘亜紀は現小学校に転入した5年生より、進学塾に入塾。C市の「激しい受験競争と名門意識」に比べると随分呑気だと私は思っている。それでも6年になると、テストの回数も増えだした。テスト前には母が付ききりで指導、0時を過ぎることが常である。私と娘のトラブルが連続した。かっとなって手をあげてしまうことも度々ある。しかし私は「絶対に受験させるのだ」と思っている。娘は点数の良いせいもあり、内心は嫌であっても現在の生活を受け入れているようである。

娘に反抗されると、私はすべてが嫌になり逃避したくなる。少し前も、トラブルの後「困らせてやろうと思って」家を出た。行く所がないので、電車で郷里D市まで行き駅前のホテルで1泊して帰ったことがある。夫はとても心配していたが、娘はけろっとしていた。

志望校決定の時期になってきた。私は中学校見学に回っている。昨日受験校をめぐって2人で話し合ったが、最後はまた喧嘩になった。私は受験指導に熱心で大学合格率の良いE校がいいと思うが、娘はF校の洗練された雰囲気気に入っている。「どっちでもいいよ。どうせまたお母さんが決めるんでしょ。」と娘は言った。「学習に介入するのは中学校入学まで。」と言うと、「本当かしら。また勉強勉強と言うんでしょ。」と言われた。

「私は本当に駄目な人間。子どもに当たってしまう」、「誰かが傍らにいて欲しい。私は自分で自分のお守りができない人間だ」。

【臨床像】（初回の印象から）

すらっとした体型。色白で整った面立ち。セミロングで軽い内巻き風のヘアースタイル。控え目で自然な感じのメイク。形よく整えられた爪には透明に近いマニキュア。仕立ての良い淡いピンクのシャツブラウス、黒のタイトスカート、ベルト。プラチナ(?)の細いネックレスと同素材のやや大振りのイヤリング。黒エナメルのパンプスとバッグ。全体が品良くコーディネートされ、清潔な感じである。生々しさがあまり感じられず、清楚ではにかみがちな少女—たとえばローランサンの絵の中の少女—のような雰囲気である。背筋・首筋がずっと伸びて、歩く姿も座る姿勢も端正である。

緊張した様子であり、面接室に入ってから暫く伏し目がちで呼吸を整える風であった。その後一気に話されたが、表現は折り目正しく、語彙は豊富である。文語的表現もある。

以上、#1；x年8月1週、#2；8月2週、#3；8月3週の面接の内容である。

【課題】

- ① 母自身の生育歴及び母子関係の見直しとその客観化を通して、母の精神的安定を図る。
- ② それにより、ゆとりある姿勢で娘との関係を構築し得るよう支援する。

【対応】 原則として週1回の母親面接

III・事例の経過

和子さんの発言は「」、筆者の発言は<>、それ以外の発言は『』で表す。

#4；X年9月2週

ハンカチを右手に持ち、両手を揃えて膝の上に置かれた。

「あれからいろいろとまた考えていた。」「私は、小学校に入った頃から地獄のような日々だ

った。『1番になりなさい。』『勉強しなさい。』『ピアノの練習をしなさい。』と私の母は何時も金切り声で叫んでいた。祖母が何か用事を頼んでも『今、和子に勉強をさせています。』と言って断っていた。その時は祖母も了解していた。「私の母は、参観日以外でもよく学校に来ていた。教室の後ろに直立不動で立って見ている。」「それから、よく先生への手紙も託された。先生は、『お母さんの御手紙は怖いからね。』など言いながら受け取られる。間に入った私は、消え入りたいような気持ちだった。」

「こんな事も思い出す。」「私が小さい時、妹と同じ部屋に寝ていると、母が見回りに来る。私は寝付きが悪いので、大抵その時はまだ起きている。妹に対しては蒲団を掛け直したり胸の辺りをトントンと叩いたりするのに、私の所は何時も素通りする。私は狸寝入りをして、次は私の所でトントンしてくれると待っているのに。寂しかった。」

＜期待はされていて、愛されてはいないと思われたのでしょうか。＞

「そのとおりです。母は人を慈しむ人ではなかった。私の子どもにはこの悲しみを味わわせないでおこうと思っている。私は30年も回り道をして、ようやくこの考えに達した。以前そのことを母に言ったことがある。母は黙ってそれを聞いていた。」「しかし妹が、『自分は余り手を掛けてもらえなかった。』と母に訴えた時、『そのことを自分の子どもを育てるとき役立てたらよい。』と言ったそう。私が30年かかって搾り出すようにして得た結論を、軽々しく扱って欲しくなかった。自分が考えたように言って欲しくなかった。」とハンカチを固く握りしめ、声を絞り出すようにして語られた。

「母からの連鎖を、私の所で、私の孫のためにも断ち切らねばと考えている。でも私は、『私の子ども時代を返して。』と母に言いたい。」

「母は闘病生活の末亡くなっている。妹と私が看病していた。心の中では、もっと苦しむがよい、このまま死んでしまうのではなく、もっともっと苦しめと思っていた。傍目にはかいがいしく看病しながらそんなことを思い続けることがまた苦しかった。」

＜ぶつける相手がない思いを、御自分の中に持ち続けておられるのですね。＞

5 ; X年9月4週

「今は中学校の説明会シーズンで、私はとても忙しい。娘も土曜日の午後と日曜日の全日塾の追い込みになっている。」「翔ちゃん（亜紀ちゃんの弟・幼稚園年長組）はほったらかしで、私はとても悪い事をしているという罪の意識がある。この間も、私が娘の勉強を見ている間に、遊び疲れてお風呂にも入らず寝てしまった。真っ黒な足の裏を見ながら、本当に悪いなと思った。」「E中学校かF中学校の何れかを受験させようと思っている。娘はお洒落な雰囲気F校が気に入っているが、私は受験指導については学校に任しておけるE校がよいと思っている。娘と私は、平行線のままだ。」

「この間の日曜日、A市で模擬テストがあった。F校を受験する子ども達も沢山来ていたけれど、ベタベタとくっついて独特の雰囲気があって『何だか嫌な感じ。』と娘は言っていた。」「だから今のところE校かF校と、あと1校滑り止め受験という事になる。」

6 ; X年10月2週

「先日、小学校の運動会があった。私と主人もそれに参加した。家に帰った時、息子は『お父さん、お母さん、ご苦労様。』と言った。この子は姉の受験のために犠牲になっているのに、なんて愛おしい事を言うのかと思った。『お母さんにとって翔ちゃんは宝物。』と言うと、『お母さんも僕の宝物。』と言ってくれる。」

「娘は何をして貰っても当然と思っている。幼稚園の頃、同じ事を私が言うと、『大きな

ってお金儲けををすると思ってそう言うんでしょ。』と言った事がある。今その話をすると、『そんな事言ったの。今は思っていない。ごめんね。』と言った。」

「先週の日曜日にも、地区の運動会があった。運動会の後、子ども会で打ち上げパーティーがあった。私はお母さんの中に立ち交じる事が出来ず、つい尻込みしてしまう。七夕やクリスマスにも、子ども会ではいろいろ催しをする。私の家は子ども会に入っていないので息子はそんな時も参加できない。あまりにも不憫なので、人気のない時に集会所に行って七夕の願いをこっそり付けさせた事もある。」

「幼稚園も家のすぐ近くにある。近所のお子さんはそこに通っているけれど、私はお付き合いが苦しくて、バスで通う別の幼稚園に行かせてしまっている。息子は、『どうしてみんなと同じ幼稚園じゃないの。そこへ行きたいの。』と言う。私はこんなふうだけど、幼稚園から帰った後は、翔ちゃんは近所の子とよく遊んでいる。」

「私の子どもの頃、親から友達付き合いを制限された事の悪影響を沢山感じている。来年の小学校入学を契機にして、子ども会に入ろうと思う。」

＃ 7 ; X年 1 1月 1週

「昨日はG大学で模擬テストと講義があったので、私と娘は朝7時に家を出た。テストが終わって、『どう、大丈夫。』と聞くと、『うーん。』と頼りなさそうに言う。体を擦り付けてきたり、甘えたふうをする。背丈は私ぐらいあるので抵抗感もあるが、よしよしなどと言って、頭を撫でたりしている。このまま依存心が出来てもいけないとも思うが、甘えさせている。」

＜お母様のお話を聞いていますと、甘えられるというのはとても大きな事ですね。＞

「そうですね、私はそのように甘えさせて貰った事は1度もなかったから。妹は結構うまくやっていたようだけれど。」

＜お母様もまた、そのお母様—あなたのお祖母様—との関係で何かがあったのでしょうか。＞

「それはあったと思う。母は婚家の事を悪く言っていた。父との関係も良くなかった。」

「父と母の事で、どうしても母を許せない事が2つある。」「父は53歳の時癌にかかり手術をした。かなり危険な手術だったが、うまくいった。その間3カ月仕事を休んだ。退院して、まだ傷跡も生々しい状態の父を横に置いて『ああ、来年のお正月はお金もないままに迎えるのね。』と母は言った。その時の父の辛さと怒りの顔をはっきりと覚えている。」

「それからもう1つ。59歳の時にまた手術をした。実家の常として、コネやら何やかやを使って1番の名医の執刀だった。手術を3日後に控えて、私はもう結婚していたが、お見舞いに行った。入院の直前にも父と母の間には諍いがあったようだ。私は父の手を握って、『お母さんと何かあったの。』と聞くと、険しい顔をして『あれはもういい。諦めた。』と言った。その直前、母は私に『あんな奴死んでしまえ。』と言った。こんな状態のまま手術に臨んで、今度は駄目なのではないかと思った。」

「手術に際して麻酔をかける時、母は『さあ、夢の国に行きなさい。』と言った。私には『そして、もう帰らないでいいよ。』と言っているように思えた。私は父の手をずっと握っていたかったが、どうしてもそれが出来なかった。今でもそのことを後悔している。母の言葉に対する父の表情はそれはそれは怒りに満ちたものだった。こんな顔をして（眉をうんと寄せ唇をゆがめて、その時の表情を再現）。私は父親似と言われている。」「手術はうまくいかなかった。その3日後に父は亡くなった。」

「1年後亜紀が生まれた。“お父さんの代わりに希望の星”と思い母にそのことを話した。母は亜紀の世話を嫌がり『孝男さんの家の孫なのだから、そちらの方へ行きなさい。』と言った。」

そのように母は考えていたのだと知った。」

「昨日夢を見た。小さい頃の私が、必死に何かを訴えている。しかし何も理解してもらえず、とても苦しかった。丁度、幼稚園の頃の苦しさだった。」

8 ; X年11月2週

「前回の帰り道に考えた。子育てによって、私自身が子どもの時にして欲しかった事、されて嫌だった事を癒している。子どものお陰だと言える。」

「私もその後反芻していました。「お父さんの代わりに希望の星」という言葉。それから、「母からの連鎖を私の所で私の孫のためにも断ち切らねば」という言葉を。>

「ところがそうは思っている、日常生活はそうにはいなくて、この間とてもつまらない事で大喧嘩をしてしまった。」「塾のテストの見直しをしていて、ケアレスミスの叱責をした。すると娘は『お母さんは私の気持ちを分かっている。』と言って泣き出した。部屋に籠もって夕食にも出てこない。いくら声をかけても駄目。リクエストのハンバーグを作ったのに。部屋にそれを持って行ってもまだ無視をしたままだった。私は娘の顔をめがけてハンバーグを投げつけた。その後、取っ組み合いの喧嘩になった。夫が取りなしてくれたので止まったが。」

「私はとても反省した。でもそれを言葉には出来ないで、益々落ち込んだ。」

「次の朝、娘は『昨日はご免なさい。』と言った。私は、『塾へ送って行ってもらおうと思っ

て言っているんでしょ。』と言った。本当はとても素直な心になっていたのに。」
「その日娘は学校で喧嘩をした。3人の女の子とやり合い、相手を泣かせてしまった。きっと憂さ晴らしの気持ちがあったと思う。娘の事を『ガリ勉。』とか何か言ったのに対して『悔しかったらやってみな。結構大変なんだから。』とかいろいろ言い返した。『だってそうだよ。大変なんだから。』と私にも言っていた。」

「十分分かっているつもりでいても、まだまだ子どもの苦しさに思いを馳せる事が足りないと思う。腹が立てばどうにもなくなる自分を自覚している。」

「娘は『私だって苦しいから、友達のマンションの屋上まで行った事があるよ。』と言った。また以前に中学生新聞の自殺の記事を、私の目に触れる所に置いてあった事もある。」「今の時期はもう誉めて自信を持たせる事を大切にしようと思う。」

X年11月3週 「家庭の都合で」ということで、面接は休み

9 ; X年11月4週

この日は面接予定日ではなかったが、来所された。切迫した表情だった。

「主人の母が急に亡くなった。家族4人で葬儀のため実家に帰った。夫方の親族が集まった。初めて会う人が殆どだった。本当に不愉快な思いをした。耐え難かった。」

(膝の上で両の拳を握りしめ、体を硬くし、目を強く閉じ頭を強く振って)

「葬儀だというのに連日酒盛りをして、大声で喋り大声で笑う。意地汚い飲み食いを繰り返す。私はお台所の仕事をしていただけで、お酌をしなければならなくなった。屈辱的な思いをした。」「思い出すのもぞっとするような卑猥な話をする。息子に対してまで、“電気アンマ”というんでしょうか。股間に足を入れて…」「息子は珍しいからキャッキョッと喜んでいて。私は、こんな人達と同じ場所にいるなんて、いたたまれなかった。もう2度と来るものかと心の中で叫んでいた。」

次回の面接日の予定。娘の受験に伴い多忙になるので、「一段落するまでは休むことにしたい。」とのこと。<困った事があれば、面接を入れますから。>と伝えた。

10 ; X + 1年2月1週

「娘の受験は終了した。結局 E 中学校を受け、合格した。娘が気に入っていた F 中学校は、受験しなかった。特別講習の時の F 中学校志望者間で、塾同士の対立があったり、気に食わぬ講師の時間に示し合わせてトイレに行くなど、所謂“女の子的意地悪”の数々を見て、『F 中学校は私には向かない。』と娘は言った。」「E 中学校の前に、1 校を“滑り止め”に受けた。こちらの方が緊張していた。発表を見に行つて番号があった時、娘も私も涙が止まらなかった。E 校の時の方が、冷静だった。」「希望校に合格したので、後はゆっくり過ごさせようと思う。私は今、ほっとしていると同時に、何か虚脱感がある。」

11 ; X + 1年2月3週

「先週の土曜日の午後、E 校の集合日だった。娘と 2 人電車で並んで座り、同じ時間に同じ景色を見て過ごした。肩の力が抜けたような時間だった。私が『こんな気持ち何年ぶりかしら。』と言うと、『ゆったりね。』と言って娘は笑った。」

< ゆったりとした、穏やかな時間を過ごされたのですね。 >

「あの子は私と違って、覚めた所がある。しかもとても強い。いつも堂々としていて伸びやか。とても羨ましいと思う。私の子どもの頃を思うと、時には憎らしくなる事も。憎らしくなるのは女同士からなのだろうか。」

「さて、私はこれからどうすればいいのか。ほっとする一方、次の事を考えてしまう。良い状態になった時、何かいつも不安が付きまとう。良い事は私に不似合いなような、そんな気になってしまう。」「これは矢張り、幼少時の事が原因なのだろうか。」

12 ; X + 1年3月2週

「娘は毎日伸びやかに暮らしている。友達とも遊び呆けている。私はそれがとても羨ましい。」「こちらへ相談に来て、好き勝手なことばかり話してきたが、今は何かホーッとした感じ。」「勉強のことは子どもに任せて、私自身の生き方を探そうと思う。どっぷりと専業主婦に浸かっているのではなくて。」「しかし一体何をしたらいいのか。私は怠け者だから、責任を持たなければならないものは尻込みしてしまう。」

< 地域の子ども会とか、中学校の母親のサークルやボランティアとか。いろいろなものの中からゆっくりお母様にフィットするものを探していかれたらどうでしょう。 >

13 ; X + 1年4月1週

「中学校からは、課題が出されている。娘はそれを自主的にやっている。私はもう口出しはしない。勉強のことは任せておこうと思っている。」「今はトラブルもないし、娘と 2 人のんびりやっている。時には甘えて、べったりとくっついてくる。夜も一緒に寝たがることもある。そんな時はしたいままにさせている。」「私は母に甘えることができず、いつも緊張していたのに、娘は伸びやかにその気持ちを出せる。羨ましく思えるし、時には憎らしくもなる。」

「翔ちゃんも小学校に入学する。私だけの時間ができる。何かをしよう、何かをしなければと頻りに思っている。その時、人と交わることに躊躇ってしまう。なぜこんなに臆病になるのかというと、自分が受け入れられないと思うから。これは矢張り、物心付いた時から親に受け入れられていないという思いがあるからだと思う。」

< 育ててこられる中での様々な思いを、御自分の子育てにはプラスに転換しようとなさってこられましたものね。よくやってこられましたね。 > < 中学校に入学されて、新しい環境一しかも優れた学力の生徒ばかりの集団一の中で、亜紀ちゃんなりの不安や緊張があるでしょう。思春期に入っていられる中で、お母様の存在はとても大切。フウワリと支援していられるとい

う感じで。>

14 ; X+1年5月1週

「娘も息子も入学式が終わった。式の後家族4人の写真を撮った。」

「『疲れる。』と言いながらも、娘は元気に通学している。クラブも『何にしようかな。』とあれこれ考えている。」「学習では、小テストがしょっちゅうあるが満点で当たり前になっている。英語が満点でなかった時、担任から電話があつて、『お母さんも手助けしてあげて下さい。』と言われた。娘は今のところ手助けしてとか教えてとは言わない。」

<亜紀ちゃんは自分流にやっていらっしゃるのですね。『教えて。』と言われたら、課題をゆったりと、一緒に考えることを楽しむというふうな対応もありますから。>

15 ; X+1年5月4週 最終回

「入学式の写真が出来てきた。それを見ながら、多くのことを考えた。他の人達はこれを祖父母などに配るのだろうけれど、私には見せるべき人々はもういない。」「私には郷里はもうない。友達もいないし同窓会にも行けない。実家は荒れ果てて、塀もあちこち崩れている。私が住んでいた頃の面影はない。没落した家の娘は、旧知の人達にも会えない。写真を見ながら、この背後にある、私の切り捨てたものの数多さを思った。私は自己中心で見栄っ張りのエゴイストで、自分の意に染まぬものは、悉く排除してきた。」「これからは、私に出来ることで人のためになることを自分なりに考えて、やっていこうと思う。」

<そうですね、ゆっくりとね。> <写真は、お母様が自らの体験と向き合いつつご自分で築き上げられたものの象徴なのではないでしょうか。>

「『お母さんご覧なさい。私はこんなに立派にやっているのよ。』という気持ちだった。」

<写真立てに入れて飾っておかれますか。>

「そうですね、ピアノの上にも。でも、私の入っている写真は、どうも、なんだか…。」はにかんだような表情をされた。

IV・ 考 察

考察は次の2点で行う。1点目は、15回の面接を通しての和子さんの変容の軌跡である。2点目は、本面接の意義即ち「語ること」と「聴くこと」の意義についてである。

(考察その1：和子さんの変容)

【本ケースのテーマ】

「反抗的な娘への対応の仕方」を主訴として始まり、娘亜紀さんとのことを契機とした和子さん自身の語りという形で進められた本ケースを振り返ると、テーマは次の2点であったと考えられる。即ち、

- ①「家」及び既に故人になっている和子さんの母との、真の決別。或いは母からの、解放。
- ②和子さんが、「母」になっていく道のり、の2点である。

以下このテーマに沿って15回の面接を検討していくが、#8、#9を分岐点にして和子さんの語りに変化が見られる。従って、全体を3期に分けて吟味することとした。

【各期の吟味】

【前期；和子さんの告発―「家」と実母―】 初回～#7

実母によってもたらされ、自己の性格形成にも多大の痕跡を残した多数の辛いエピソードと、母及びその背後にある「家」への怒りが表出された時期であった。

まず、乳幼児期のエピソードが語られる。母からの拒絶と、自己の存在に対する疎外感の原

初体験である（インテーク）。この苦しさは今でも夢に見ると和子さんは語る（#7）。

母の養育姿勢は、「世間や親類縁者に対する体面を保つこと・母の価値観を満足させること」で首尾一貫していた。23歳の時、支配され続けることも限界に達した。25歳で初めての反乱を「決行」。孝男氏との結婚は「合法的な家出」であった。

孝男氏の任地での生活、亜紀ちゃんの出産、孤独と不安の中での育児。転勤で首都圏へ。長男翔君を出産。昨年再度の転勤で元の住まいに戻る。

現在小学校6年生の亜紀ちゃんは明朗闊達。自己主張も強く、社交的で学習成績も良い。和子さんはそういう娘を「すごい」と思いつつ羨望も感じる。（インテーク・#4）

娘の中学校受験にかける和子さんの熱意は大きい。これは、拒否したにも拘わらず尚かつ彼女の中に存在する「名家」の矜持であると共に、母に支配され続けてきた子ども時代の悔しさの意識せざる埋め合わせが、同性である娘に向けられているのであろうか。

甘えてくる亜紀ちゃんを抵抗感を持ちつつも受け入れ、ついで交歓のなかった母との関係が想起されるのである（#7）。また、翔君に関わる地域や幼稚園のつき合いが出来ないことにも、友達付き合いを制限されてきた生育暦の影響を感じておられるのである（#6）。

母からの連鎖を、「私の孫のためにも、私の所で断ち切らねば」と思い、「子ども時代」を奪った母への怒りは激しく、そして哀しい。病床の母を傍目にはかいがいしく看病しながらも「もっと苦しめ」と思い、そう思うことがまた彼女を苦しめた。和子さんと筆者は、長い沈黙を共有し合った（#4）。

母への怒りの表出は更に続く。父の2度の手術と死、亜紀ちゃん誕生に纏わるエピソードである（#7）。母の、父に対する思いと言動を弾劾し、父の怒りと孤独を思いやるのである。父の死1年後に生まれた亜紀ちゃんに対しても、「孝男さんの家の孫なのだから、そちらへ行きなさい。」と言う母に、「そのように母は考えていたのだ」と和子さんは悟る。「お父さんの代わりの希望の星」と喜んでいたのに。

[分岐点；事件2つ] #8・#9

この時期、2つの「事件」とも言うべき出来事が起こる。#8では、和子さんが亜紀ちゃんの顔をめがけてハンバーグを投げ付け、取っ組み合いの喧嘩になる。

その後「反省し、素直な心になって」、「子の苦しさに思いを馳せることが足らず、腹が立てばどうにもなくなる自分を自覚」するのである。娘である亜紀ちゃんとの関わりで、和子さんのこのような思いが語られたのは初めてのことである。和子さんがプチ家出を敢行した時でさえも（インテーク）、関心は亜紀ちゃんの態度であったのだから。「子育てによって、私の子ども時代を癒している。子どものお陰だと言える」と語る和子さんの口調は、それまでの悲痛さはなく穏やかな響きを持ったものになってきている。#9では、孝男氏の母の葬儀で会した夫の親族の品位のなさへの怒りと、彼らとの決別が語られる。「母を見返してやり」、「合法的な家出」として自分の親族一同の反対を押し切って「決行」した結婚であったが、孝男氏はさておきその一族の生活様式や文化は、和子さんには承認し難いものであり、今後は決して相交わるまいと決意するのである。

[後期；実母からの解放・和子さん自身の生き方・「母」になること] 10～ #15（終結）

亜紀ちゃんの出産は終了する。希望校合格に、「ほっとしていると同時に、何か虚脱感を感じている」と和子さんである（#10）。「娘と2人電車で並んで座り、同じ時間に同じ景色を見て過ごし」、「ゆったりね。」とほほえむ亜紀ちゃんと、和やかな土曜日の午後を共有する（#11）。

亜紀ちゃんと2人のんびりした時間を楽しみ、「時には甘えて、くっついてくる。夜も一緒に寝たがることもある。そんな時はしたいままにさせて」いるのである。亜紀ちゃんの伸びやかさが「羨ましく、時には憎らしく思う」が、以前のような（#7）抵抗感はなく受け入れられる（#13）。「母」になることへの歩みが始まったのである。

#10以降の和子さんの語り口・表情は穏やかである。引き続き、幼少時のことが現在の自分に落としている影について語られはするが、進るような怒りと悲しみを伴っていた前期のそれとは異なる。亜紀ちゃんとの関係をとおして、受容も抱擁も安らぎも与えられなかった自らの生育歴を引きずりつつ、そのような存在としての自己を受け入れ、不安と躊躇を同伴者としながらも、次なるステップへと歩み出すこと、即ち「私自身の生き方」を模索されるに至るのである（#11・12・13）。

子ども達の入学式の後、4人で写真館へ行き、家族写真を撮られた（#14）。その写真を見ながら和子さんは、この家族の、今のこの状態を獲得するために、排除し切り捨ててきたものについて述懐される。しみじみとした穏やかな語り口である（#15）。自分に対して拒絶的・否定的であった亡き母に対して、「お母さん見てご覧なさい。私はこんなに立派にやっているのよ。」と、ようやくやっと思えるようになった。そして「これからは、私に出来ることで人のためになることを自分なりに考えてやっと思おう。」と語られる。「写真は飾っておかれますか。」との筆者の問いに対して、「ピアノの上にも。でも、私の入っている写真は、どうも、なんだか…。」と、はにかみがちな表情で思案しておられた。「母」になる事への歩みが始まったこと、その面映ゆさに戸惑っておられることが感じられる。

ためらいや戸惑いを常に同居させつつも、亡き母への怒りからの解放・和子さん自身としての生き方・「母」になることへと向かわせる凱風を筆者は感じたのである。

（考察その2：「語ること」と「聴くこと」の力）

筆者のなしたことは、和子さんの語りにただひたすら寄り添うことであった。彼女の悲しみや怒り、疎外感や不安そして模索や安らぎのほとぼしりを、尊敬と共感を持って聴き続けた。

「人間は（中略）自分の悲しみや苦しみを分かち合い、共に涙を流してくれる同伴者を必要としている」。「人間が（中略）正直、率直におのれの内面と向きあうならば、その心は必ず、ある存在を求めているのだ。（中略）それは感傷でも甘えでもなく、他者に対する人間の条件なのである。だから人間が続くかぎり、永遠の同伴者が求められる。人間の歴史が続くかぎり、人間は必ず、そのような存在を探し続ける」（遠藤・1982）。

人は自らの語りにじっと静かに耳傾けてくれる存在を前にした時、安心して語り、時には批判し、それを通して自発的に自己吟味や分析をし、状況の中で自分に相応しいことを探しつつ動きだし、生きていくのである。「聴くこと」とは、語り手の「語ること」に対して信頼と尊敬をもって同伴することであり、それが支援することなのである。和子さんが「語ること」とおして自ら変容していかれたのは「語ること」と「聴くこと」の力によるものなのである。

V・ 終 わ り に 一夫との関係性・亡き母への赦し

人は1つの課題を為し得た後、小休止はあったとしてもまた次の課題に出会う。シジフォスの岩か弁証法的発展であるかはさておき。和子さんにとってのそれは何であろうか。

先ず考えられるのは、確実に彼女を支えてきたと思われる夫孝男氏との、対等に支え合う者としての関係性の問題である。この点について面接時に殆ど語られることはなかった。

次に考えられるのは、亡き母の呪縛から解放された後の「赦し」である。

「真正の赦しは憤りの傍をすり抜けていくのではなく、その真中をくぐり抜けていくものです（中略）。初めてその人を赦す可能性を手に入れるのです。抑圧されていた憤り、激怒、憎しみは、乳幼児期における迫害の物語が明らかになった時初めて永遠に続くことをやめるのです。そうなった時初めてこれらの怒りと憎しみは、そうあらねばならなかったことに対する悲しみと痛みに変身するのですし、その痛みの中で怒りと憎しみが真の理解に場所を譲ることにもなるのです。今は大人になった人間としての理解に。その人はそうやって自分の両親の子ども時代をも垣間見、そうして最終的には自分の憎しみから解放されて、真の豊かな共感を持ち得るようになるのです」（アリス・ミラー・2004）。

筆者が和子さんの母自身の育てられ方に触れかけた時、和子さんは話題を転じられた（#7）。何れの日にか和子さんは、あのようでしかあり得なかった実母の当時の状況や立場に思いを馳せられるのであろうか。夫や子どもに対する世間的評価によってしか自己を主張出来ない、そんな時代と地域の中で育てられ、生きざるを得なかった母の怒りや悲しみや無念さを理解されるのであろうか。何時の日か、そんな「赦し」・和解があるかもしれない。今はまだ、その時期ではないにしても。

それにしても和子さんの身だしなみや立ち居振る舞いは、一貫して端正であった。悲痛な思いを語られる時も、声や姿勢が乱れることはない。膝の上に重ねられた手に持たれているハンカチの、その握り方が強くなることはあっても。それは、芥川龍之介の小説「手巾」に登場する貴婦人を彷彿とさせるものであった。語り方もまた同様であった。

筆者は今もローランサンの描く少女の絵を目にすると、「和子さんは今どんなことを考えていらっしやるのかしら。」と思いを馳せ、我知らず微笑んでいるのである。

参 考 文 献

A・ミラー	(山下公子訳・1983)	『魂の殺人』	新曜社
A・ミラー	(山下公子訳・1985)	『禁じられた知』	新曜社
A・ミラー	(山下公子訳・1996)	『才能ある子のドラマ』	新曜社
A・ミラー	(山下公子訳・2000)	『子ども時代の扉をひらく』	新曜社
A・ミラー	(山下公子訳・2004)	『真実をとく鍵』	新曜社
A・ミラー	(山下公子訳・2004)	『闇からの目覚め』	新曜社
遠藤周作	(1983)	『イエスの生涯』	新潮社
同	(同)	『キリストの誕生』	同
大日向雅美	(2000)	『母性愛神話の畏』	日本評論社
橋本やよい	(2000)	『母親の心理療法』	日本評論社
H・ドイッチ	(懸田克躬他訳・1964)	『母親の心理』	日本教文社

